

『ゆらゆらと水』

芳崎 洋子

〈登場人物〉

クリコ

ハツコ

レイ

ミナミ

ナナ

トシキ

結城

この世への誕生を待つ者全てが目にする赤の光景。それはこの先を暗示するかのような胸騒ぎと安らぎの世界。

ハツコとレイは、並んで下界を眺めていた。

ハツコは、赤いオリエンタル調の衣服に身を包んでいる。

一方のレイも、頭から赤い布で全身をおおっている。

ハツコ 飽きへんやろ。

レイ うん。

ハツコ 毎日見ててみ、だんだんと変わって行くから。この辺りの成り立ちがよお分かる。

レイ うん。

ハツコ、見ている先を指さし、

ハツコ あれがティラノサウルス。とがった歯と大きいあごで獲物をガシガシ食いちぎってるやろ。あつちのトリケラトプスも頑張ってるけどな。まあ、草食性やから迫力ではちよい負けるな、ティラノサウルスに。

レイ ハツコちゃん。

ハツコ くん？

レイ、ハツコを見て、

レイ それって何？

ハツコ え。

レイ 今言うたやつ。

ハツコ、笑みを浮かべて、

ハツコ ああ、恐竜の名前。

レイ 恐竜？

ハツコ 恐ろしい竜と書いて恐竜。

レイ 恐ろしい竜？

ハツコ そう。

レイ なあ、竜ってホンマにおるんか？

ハツコ 竜は想像上の動物や。でつかあーい蛇に似てんねんで。そんで長い二本のひげと、頭には角と、足もちゃんとあるらしいわ。

レイ へえ。それよりも恐ろしいのが恐竜か。

ハツコ そ。まあ、言うてもあそこのも、じきおらんようになるけどな。どっちも最後の恐竜の
一つとして絶滅したって言われてるし。

レイ 絶滅？

ハツコ ほら、氷河期やから。

レイ 氷河期？

ハツコ そう。今まで築き上げたものがぜーんぶ無くなんねん。

レイ ふーん、無くなるんか。そっちの方が恐ろしいな。

ハツコ、次々に別の所を指さしながら、

ハツコ ほら、あそこが第一氷河期やった所。で、あっちが第二氷河期やろ。そんで向こうが第

三水河期。その向こうが第四氷河期で、そっちが第五、

レイ (遮って) それってどこまで続くん？

ハツコ そりゃ延々と続くよ。この辺り一帯ぜーんぶ埋め尽くすまでは。

レイは、ハツとして、

レイ (ここも？)

ハツコ (ここ？)

レイ うん。ここも氷河期が来るんか？

ハツコ いずれはそうなるやろな。

レイ そうなん？

ハツコ うん。

レイ その後、どうなるん？ 氷河期の後。

ハツコ そうやなあ…。

レイ うん。

ハツコ そういう中でもなんとか生き残るやつはおるんやろな。そんで新しい環境に適應して生き延びていくねん。

レイ (ここは生き延びれるんか？)

ハツコ え。

レイ (ここは生き延びれるんかって聞いてんねん。

ハツコ アカンで、質問攻めは。そんな子供は学校の先生に嫌われる。

レイ (強く) なあ、ここは生き延びれるんか？

ハツコは、その勢いに、

ハツコ うーん…。生き延びるやつもおるやろし、生き延びれんやつもおるやろな。

レイ そんなんアカンやんか。

ハツコ なんです？

レイ みんな生き延びなアカンやんか。

ハツコ 自然淘汰って言うんやて。

レイ ……自然淘汰？

ハツコ そう。それが生物進化の歴史やって。

レイ それも占いか？

ハツコ え？

レイ ハツコちゃんの占いか？ だっていつつもやってるやんか。(怪しげな仕草で早口に)「あなたは将来、良い伴侶に恵まれ、食べることに一生困りません。ただ一つ気を付けるとしたら腰ですね。ここにあなたの弱点があります」「そう言えば最近、腰が痛いような」「そうでしょう、あなた」「分かるんですか？」「そりや全部出てますからね、このお鉢に。まあ、当たるも八卦、当たらぬも八卦とは申しますが、」

ハツコ (遮って) ちやうよ。これはちゃんとしたお話。昔、ダーウィンっておっさんがおつてな、

その時、突然、赤の光景が、日常の光景に変わった。

そこは小さな雑居ビルの最上階。その7階の窓から階下を見下ろしていたハツコとレイが、同時に振り向く。

その先には、クリコが立っていた。

レイ、クリコを見ると、嬉しそうに赤い布を脱ぎ捨てた。レイは、半ズボンからカサカサの膝小僧をのぞかせた子供。その肩から掛けられたポシェットは、膨らみを見せている。

レイ こんにちは！

ハツコ 早かったやん。どうやった？

クリコ ……。

電気のスイッチに手を置いたまま、暫し二人を眺めていたクリコは、テーブルに向かい、

赤いテーブル・クロスを剥ぐ。すると下から事務机が現れた。その横には小さな

サイド・テーブルに電話機がある。

机の上に鞆を置くクリコ。

ハツコ、クリコに近寄り、

ハツコ その顔は押し切られた顔かあ？

クリコ ……。

ハツコ まあ、ここ入口とトイレの場所も悪いしな。やっぱ水の流れるところは運気を左右するから考えなアカンで。

クリコは、柔らかい口調に似合わぬ無表情さで、

クリコ もうそんな時間やつけ？

ハツコ え。

クリコ ねえ。

ハツコ うーんと…、ちよいと早いかな。

クリコ 昼間は私に仕事させてほしいな。

ハツコ エエやん、少しくらい早くても。

クリコ 昼間にあの灯りにすんの、やめてっってお願ひしなかつたっけ？

ハツコ どうっかなあ…。

クリコ へえ。

ハツコ うん。忘れた。

クリコ 忘れるって、どんな漢字書くか知ってる？

ハツコ 漢字？ (少し考え) 健忘症かなあ。

クリコ 亡くなる心って書くのよね、確か。

ハツコ 何それ。

クリコ ちよつと心無い行動かなあ、とね。

と、レイを見るクリコ。

それを受けたレイは、出来る限りの満面の笑みを浮かべる。

目をそむけるクリコ。

レイの顔が曇る。

クリコ お嬢ちゃん。

レイ ……え。

クリコ あ、お坊ちゃん？

レイ レイのこと？

クリコ (レイを見て) そう、あなたのこと。お母さんが心配してるんじゃない？ いつつも「

こに来てたら。

レイ、じつとクリコを見つめて、

レイ ……お母さんって…。

クリコ もうお帰りなさい。ね、その方がいいわ。

ハツコ ただ遊びに来てるだけやん。(レイに) レイちゃんのお母さんも忙しいねんなあ、きつと。

レイ ……。

クリコ ほら、引き止めたら困ってるでしょ。この子も。

その時、レイ、額を押さえ、

レイ 冷た！

ハツコ 何？

レイ なんか落ちて来た。

と、天井を見上げるレイ。

ハツコも、天井を見上げ、

ハツコ 雨漏りちやう？ 夜中、よう降ったし。

クリコ 失礼ね。雨漏りなんかしてないよ。

ハツコ でも屋上ひびきだらけやで。来月梅雨やし直しとかな。

クリコ 雨漏りなんかしてないって言ってるでしょ。

ハツコ ここ築40年は確実やろ？

クリコ 違うよ。36年。

ハツコ な。もうそろそろ移り時やって。

クリコ、ややムツとして、

クリコ 昼間はとにかく仕事させて。

と、赤い壁掛けを剥ぐクリコ。その後ろからは、スチール製の本棚が現れた。

ハツコ ちよつと今日だけ頼むわ。

クリコ どうして。

ハツコ 昨日、電話があつたんやんか。アタシに弟子入りしたいって女の子から。

クリコ 弟子入り？

ハツコ そう。毎朝、新聞でアタシの占いを見てから出かけるんやて。そしたらいつもその通りになるねんて。

クリコ へえ。

ハツコ アタシも弟子取る気なんか全くないけど邪険にはできへんやん。言うたらファンやねんし。

クリコ ファン。

ハツコ そうや。新聞なんか読者がおって成り立つもんやろ。ただのファン・サービスマネン。だから今日だけ昼間使わせて。10分で済むから。

クリコ じゃあ、このままでいいでしょ。どうせ一回だけなんやし。

ハツコ 一回やから夢を壊したらアカンねん。こういうのはムードが大切なんやから。

クリコ ムード。

ハツコ 神聖なる占いと排他的な事務所はどう頑張っても合体せえへん。

クリコ でも実際ここでやってるわけやし。

ハツコ だから毎日3時になったら模様替えるんやんか。事務所から占いの館への変身の儀式。

これこそ相反するものの平和的共存や。

クリコ 平和的占いはなんの変哲もない税理士事務所で産み出される。読者は真実を知る権利をも同時に有するのである。

ハツコ ……クリコ。

クリコ 何。

ハツコ 別にエエけどな。

クリコ 何よ。
ハツコ アンタの意固地、最近きついで。
クリコ ……ほっといてよ。

その時、レイが、

レイ ……もう行くわ。
ハツコ (レイに) ごめんな。このおばちゃんも悪気は無いねんで。
レイ ……うん。
ハツコ いつでも遊びに来てエエからな。このおばちゃんおらん時に。
クリコ ハツコ!
ハツコ (レイに) あ、このお姉ちゃんな。

と、ハツコは、レイの背に手を回し、ドアの方へと導く。

レイは、やや肩を落とすし、

レイ さようなら。
クリコ さよなら。
ハツコ (レイに小声で) おばちゃんの前でだけはお姉ちゃん言うたってな。
クリコ ハツコ!
ハツコ はいはい。

と、ハツコとレイは行きかけた時、

ハツコ・レイ あ!

と、同時に叫ぶ。

ハツコ なんか忘れてると思った。

と、洗面所の方へ行くハツコ。

一方、レイはポシエットの中を探っている。そして中から紙パックのジュースを取り出し、クリコに差し出す。

レイ はい。
クリコ ……え。
レイ これ。
クリコ いいよ、そんなん。
レイ あげる。
クリコ いいって。

レイ あげるって。

クリコ 悪いけど私こういうの飲まないから。

レイ ……そうなん？

クリコ そう。

レイ ……そうなんや…。

と、うつむくレイ。手の中のジュースを見つめている。

クリコは、鞆の中から書類を取り出す。

やがて、トイレの水を流す音が聞こえた。

ハツコが、戻って来る。

ハツコ はあく、スッキリした。行こか。ん？

と、その場の雰囲気を感じたハツコは、レイを見て、

ハツコ どないしたん。喉乾いたんか？

レイ ううん。なんでもない。

ハツコ なんがあるって顔してるで。

レイ なんでもないよ。

クリコ 私が断ったの。そのジュースくれるって言うから。

ハツコ なんや。ほなアタシが貰おか？

と、手を差し出すハツコ。

レイは、ジュースを後ろに隠す。

ハツコ 可愛げないなあ、アンタ。

レイ だってあの人にあげたいねん。

ハツコ (クリコに) やって。

クリコ 私飲まないって、そういう甘いやつ。

ハツコ (レイに) な。ああ言うてるし、もう、しまつとき。

レイ ……分かった…。

と、肩を落としてジュースをボシエットに戻そうとするレイ。

ハツコはその様子を見て、レイの手からジュースを取り、クリコに近寄る。

ハツコ クリコも素直に受け取ったら済むことやろ。

クリコ だって貰う方が悪いでしょ。どうせ飲まないのに。

ハツコ アンタにあげたい言うてんねんから。(レイに) なあ、子供。

レイ ……うん。

ハツコ、ジュースを差し出し、

ハツコ (クリコに) はい。

クリコ いいって。

ハツコ (ジュースをクリコの手に握らせ) はいって。

クリコ いいって言うてるのに。もう…。

と、ジュースを受け取るクリコ。

レイの顔に笑みが戻り、

レイ ありがとう！

ハツコ なんてあげた本人がお礼言うの。

レイ だって嬉しいもん。

ハツコ そっか…。ほな送るわ、そこまで。

レイ うん。(クリコに) バイバイ。

と、行きかけるハツコとレイに、

クリコ あ、ちよつと。

レイ (振り返り) え。

クリコ あり…。ううん。なんでもない。

レイ いいえ！

クリコ ……。

クリコは、レイを見つめていた。

ハツコ 今度はアタシにちょうだいな。

レイ しつこいで、ハツコちゃん。

と、ハツコとレイは、去る。

暫し、手の中のジュースを見ているクリコ。

クリコ はあ…。

と、小さく溜息をついて、サイド・テーブルにジュースを置くクリコ。そして剥がした赤い布を再び事務机と本棚にかけ、蛍光灯を赤い灯りに変えた。

ジャージャーと水の流れる音が聞こえている。

クリコ またあ。

と、クリコは、洗面所の方へ行く。
ドア・チャイムの音。

ミナミ ……すみません。

と、ドアが開くと、ミナミが顔をのぞかせた。赤い室内に戸惑いながらも、少し大きな声で、

ミナミ あのお。

すると奥からクリコの声。

クリコの声 ハツコお！ トイレ行ったらフラッシュのレバー、ちゃんと下げてっていつも言ってるでしょ。これバカになってるんやから。水がもつたないわ。

と、クリコが戻って来る。
ミナミを見て驚くクリコ。

クリコ あ…。

慌てて深く頭を下げるミナミ。

クリコ ごめんなさい。お客さんとは知らなくて。

ミナミ いえ、私の方こそ図々しくてすみません。

クリコ ええっと…。

ミナミ (一気に) 昨日お電話したミナミです。お忙しいのに本当にすみません。でも私いい加減な気持ちで来たんじゃないんです。本気で先生のこと尊敬してます。私、先生の占い毎日読んでます。すごく励まされるんです。私も占いで人を幸せにしたいと思ってます。お忙しいのは百も承知ですけど、どうかいろいろ教えてください。

と、再び、深々と頭を下げるミナミ。

クリコ ちょっと待ってください。

ミナミ ……ダメですか？

クリコ 人違いですよ。

ミナミ え。

クリコ ハツコ、あ、いや、占いの先生はちょっと出かけてるもんで。

ミナミ すいません。

クリコ 今そこでお会いになりませんでしたか？

ミナミ いいえ、どなたにも。

クリコ そっか……。あ、すぐ戻ると思いますがからこちらでお待ちください。

と、椅子を勧めるクリコ。

ミナミ、その場を取り繕うように、

ミナミ ありがとうございます。先生のアシスタントも大変ですね。

クリコ いいえ。単なる友達です。

ミナミ あ、すいません。よく遊びにみえるんですか？

クリコ いえ。このビルの持ち主です。

ミナミ あ、すいません。でもやっぱり占いには興味をお持ちですよね？

クリコ いえ。占いは全く。

ミナミ はあ……。そうですか。

クリコ はい。

と、ミナミから離れて別の椅子に座るクリコ。

間。

ミナミ あの。

クリコ はい。

ミナミ すいません。失礼なこと言って。

クリコ いいえ、とんでもない。気にしないでくださいね。

ミナミ すいません。

間。

ミナミ あの。

クリコ はい。

ミナミ 先生、何か私のことおっしゃってましたか？

クリコ ああ、少しは。

ミナミ なんて。

クリコ ……は？

ミナミ いえ、いいです。いいんです。

間。

ミナミ あの。

クリコ はい。

ミナミ すいません。やっぱりなんておっしゃってたか教えていただけませんか。私、気になつて。

クリコ さあ……。私もよくは知りませんがね、弟子取る気はないって言っていましたよ。

ミナミ ……そうですか…。
クリコ はい。

その時、ハツコが戻って来る。息をゼイゼイ切らしているハツコ。

ハツコ ああ〜、しんどおー。

クリコ 何してんの。

ハツコ (息も絶え絶えに) 階段で、来たんやけど、きつついわあ、7階は。

クリコ エレベーター使えばいいでしょ。

ハツコ あの子がな、体のためには、階段の方が、エエって、言うから、その気に、なって、行

きも、帰りも、階段使て、しもた。1階まで。

クリコ お客さんお待ち。

ハツコ ……え…。

と、ミナミを見るハツコ。

立ち上がり、深く頭を下げるミナミ。

ハツコは、慌てて呼吸を整えようとしながら、

ハツコ あ、昨日、電話、くれた方？

ミナミ はい。

ハツコ お待ち、しました。

ミナミ すいません、お忙しいところを。

ハツコ あ、ちよつと、待って、くださいね。

と、クリコを部屋の隅に導くハツコ。

クリコ 何？ いやよ、お茶くみなんて。

ハツコ ちやう、ちやう。下でな、隣のビルの、おっさんに、会ったんやんか。ちよつと、相

談したいし、下りて来て、つて。

クリコ 今？

ハツコ そう。下で、待ってるわ。

クリコ それ、早く言ってよ。

ハツコ アンタ、まだ、頑張ってるん、ねんてな。

クリコ そりや、うちのビルやからね。

ハツコ おっさんも、一緒に、頑張るって、言うてたわ。

クリコ そう。

と、ドアへ向かうクリコ。

ミナミを見て、

クリコ ごゆっくり。
ミナミ どうも。

と、クリコは出て行く。

ハツコ ちょっと、待ってな。水、飲んで来る。
ミナミ はい。

と、ハツコは洗面所の方に行く。

水道を流す音。

残されたミナミは、室内を見回す。
程なく戻って来たハツコは、

ハツコ お待たせしました。改めましてスパイラルムーン・エリカです。

ミナミ ミナミです。お忙しいところをすいません。

ハツコ いえいえ。ほな行きましょか。

ミナミ え。どこへ？

ハツコ レクチャーですよ。占いの事始め。

ミナミ あの。

ハツコ 何か。

ミナミ 弟子はお取りにならないって。

ハツコ 誰が？

ミナミ 先生が。え？ 先程のかたが。ん？

ハツコ 大丈夫。アタシにできることはなんでも伝授しますから。

ミナミ ……ほんとですか？

ハツコ ホンマホンマ。

ミナミ ありがとうございます！

ハツコ ほな行きますよ。まず占いで最も大切なことは、直感です。ま、インスピレーションや
ね。自分の直感を信じる。これが基本です。分かりますか？

ミナミ あ、ちょっと待ってください。

と、ミナミはバックからノートとペンを取り出す。

ミナミ (書きながら) 直感を信じる。こと。はい。

ハツコ ほな繰り返し返してくださいね。「直感を信じましょう」はい。

ミナミ 直感を信じましょう。

ハツコ はい。良くなりました。以上でレクチャーは終わり。

ミナミ え。

ハツコ 次に実践に移ります。アタシが質問しますから直感で答えてください。いいですか。

ミナミ はい。

ハツコ 最初は簡単などころから行きますね。リンゴは？
ミナミ は？

ハツコ リンゴからインスパイアされたことを言うねん。

ミナミ あ、はい。

ハツコ リンゴは？

ミナミ えーと…。

ハツコ ほら、赤いでも丸いでもサクサクでも青森でもなんでもあるでしょ。

ミナミ すいません。慣れないもんで。

ハツコ まあ、誰でも初めはそうやねん。けどな、それをいかにもっともらしく相手に納得させるかが占いの勝負所や。分かる？

ミナミ はい。

ハツコ 占う本人に戸惑われたら信じれるものも信じられへんやろ。

ミナミ 分かりました。

ハツコ ほな行くで。ミカンは？

ミナミ (慌てて) 美味しい。

ハツコ そうそう。ほなアボガドは？

ミナミ まずい。

ハツコ チョコレートは？

ミナミ 好き。

ハツコ 少し自分の味覚から離れましょか。

ミナミ すいません。

ハツコ ほな、机は？

ミナミ 日記帳。

ハツコ 本棚は？

ミナミ へそくりの隠し場所。

ハツコ ドアは？

ミナミ 秘密への入口。

ハツコ そうそう、その調子。エエ感じ。

ミナミ そうですか？

ハツコ うん。水は？

ミナミ ジャージャー。

ハツコ 違います。

ミナミ すいません。

ハツコ 水はユラユラやな。

ミナミ どうしてですか？

ハツコ それも直感です。そりやな、世界中いろんな占いはあるで。それを一つ一つ掘り下げていったら確かにどれも筋道通ってる感じはするわ。でもそれかて初めは誰かのハツタリから始まってんねん。そやからいかに自分の直感をそれらしく表現できる方法を開発するかがポイントやね。ま、アタシの場合は(鉢を指し)このお鉢やけどな。そのうちそれがホンマもんになっっていくねん。周りもすごいなあ、って思うようになっていくねん。分かる？

ミナミ なんとなく。

ハツコ だからミナミさんも自分らしい占いの方法を開発してみてください。

ミナミ 分かりました。

ハツコ 直感を信じて。な。

ミナミ はい。

ハツコ その手始めが自分らしい名前を付けること。

ミナミ 名前…ですか。

ハツコ うん。何がエエ？

ミナミ 何がつて急に言われても…。先生のお名前はどのところから付いたんですか？

ハツコ アタシのは、ほら、アタシは夜に助けてもらったと思うわけよ。一番頭が冴えるのが夜ってどうか。

ミナミ はい。

ハツコ で、夜の灯りと言えば月やろ。月はいろんな形に変わる。そやから螺旋状にやって変化するると直感でビビッと来たわけよ。ほんでスパイラルムーン・エリカ。

ミナミ エリカは？

ハツコ ……エリカ？

ミナミ はい。

ハツコ それも…直感…かな。

ミナミ へえー。

ハツコ アンタもちよつと考えてみ。

ミナミ はい。

ハツコ 直感を信じてな。

ミナミ はい。直感を信じて。

と、再びノートとペンに向かい、考え始めるミナミ。

その時、サイド・テーブルの電話が鳴った。ハツコは腕時計を見て、

ハツコ ああー、中途半端な時間やなあ。(受話器を取り) はい。スパイラルムーン・エリカ占いの館、または五ツ木税理士事務所です。……なんや、クリコか。……しゃーないやん、どっち言うたらエエか迷ってんもん。……はいはい。……えー、そんなん言うても今、来客中やんか。アタシでないとアカンの？ ……そやけどな。……うん。……うん、分かったから。今行くから。鞆ごと持っていけばエエんやな。……はい。

と、受話器を置くハツコ。

ハツコ ごめんな。ちよつと下行ってくるわ。

ミナミ じゃあ、私帰ります。

と、立ち上がるミナミ。

ハツコ エエねんエエねん、すぐ戻って来るし。頑張つて名前考えとつて。
ミナミ はい。

と、再び座るミナミ。
ハツコは、クリコの鞆を持ち、

ハツコ 直感を信じてな。
ミナミ はい。直感を信じて。

ハツコは、出て行った。

ミナミ 直感を信じて。か…。

と、ノートに向かうミナミ。あれこれと考へては消しを繰り返している。
しばらくして、ドア・チャイムの音。
そして、トシキが顔を出した。

トシキ こんにちは。

ミナミ (立ち上がり) こんにちは。

トシキ あれ、ハツコさんは？

ミナミ ハツコさん？

トシキ 占い師の。

ミナミ ああ。

トシキ さつき階段を必死で上って行くの見たんですけど。

ミナミ 今、ちよつと下に行かれました。

トシキ ああ…。

ミナミ はい。

間。

トシキ あの…。

ミナミ はい。

トシキ お客さんですか？

ミナミ いえ、なんか届けに行ったみたいですけど。

トシキ いえ、あなた。

ミナミ 私？

トシキ はい。

ミナミ 私は…、先生に占いの手ほどきをしていただいてるんです。

トシキ お弟子さん？

ミナミ つて言つても今日来たばかりで、

トシキ (遮って) ああ! ちょうど良かった。僕、時間がないんです。占ってもらえますか?
ミナミ え。でも私、そんな

トシキ あの、僕あの、好きな子がいるんですけど今日その子の誕生日だつてさつき聞いて。あ、
僕達、同じ職場なんです。それで何をプレゼントしたらいいかなつて。

ミナミ プレゼントって言われても、

トシキ お願いします。ハツコさんを待ってる時間がないもんで。

ミナミ ……プレゼント…ですか。

トシキ はい。

ミナミ えっと…。

トシキ はい。

ミナミは、ノートにペンで書き込みながら、

ミナミ (小声で自分に言い聞かせるように) 直感を信じて。

トシキ は?

ミナミ いえ。

トシキ (ノートを覗き込むように) どんな占いですか?

ミナミ (ノートを隠しながら) えっと…、

トシキ すいません。邪魔して。

ミナミ いえ…。(意を決して) あなた方は会社にお勤めですね。

トシキ いえ、この下のスナックです。

ミナミ あ、…ああ。そうだと思います。さつきこの階段で先生を見たつておっしやつて
たし。

トシキ はい。

ミナミ スナックですね、スナック。スナックだから…。その女の子は夕方から出勤ですね。

トシキ いえ、もう来てますけど、どっか行ってます。いつものことですけどね。

ミナミ あの、昼間からスナックって開いてるんですか?

トシキ え? 店は夜ですけど。

ミナミ あ、そうですね。皆さん早いご出勤ですねえ。

トシキ 僕は準備があるんで。

ミナミ ああ。それで他の人から彼女の誕生日が今日だと聞いて焦つてると。

トシキ 聞いたのは本人からです。「今日、ウチの誕生日い!」って。

ミナミ あ、…はい。で…、プレゼントを買いに行く時間は今しかないと。

トシキ そうです。

ミナミ そうですよ。何がいいと思いますか?

トシキ それを占ってください。

ミナミ ……え。

トシキ はい。

ミナミ ……えっと…。

困って、ただただノートに線を書くミナミ。その落書きをするうちに、

ミナミ あ。

トシキ はい。

ミナミ これはどうですか？

トシキ はい。

ミナミ 車。

トシキ 車？

ミナミ はい。

トシキ あんまり高い物はちょっと…。

ミナミ あ、そうですよね…。って言うか、いえ、そんな、本物じゃなくて、ほら、ミニチュア・カーですよ。今、精巧なミニ・カーが大人の間でも流行ってるじゃないですか。

トシキ ミニチュア・カーですか…。

ミナミ はい。彼女はセンスのある人だからきつと喜びますよ。えっと、インテリアにもなるし、暇な時、遊べるし。それで…、いつかは本物の車に乗せてあげる。なんて、どうかたと…。

トシキ ああ、なるほど！

ミナミ え。

トシキ いいですね、それ。

ミナミ ……そうですか？

トシキ それにします。

ミナミ ほんとですか？

トシキ はい。

ミナミ はい！ それが一番だと私の星は言ってます。

トシキ 分かりました。すぐ玩具屋へ行ってきました。

ミナミ 頑張ってくださいね。

トシキ ありがとうございます。

と、ドアへ向かうトシキ。

ホオーツと、溜息をつくミナミ。

その時、トシキが振り返り、

トシキ 良かったら下の店にも遊びに来てください。僕、トシキって言います。

ミナミ ありがとうございます。

トシキ あなたは？

ミナミ 私？

トシキ はい。お名前教えてください。

ミナミ 私は…、メルティングスター・ユウカです。

暗転。

赤い部屋。

ハツコとレイが、窓から下を眺めている。

ハツコ ほら、体にとげとげが付いているのがステゴサウルス。で、あそこで地面さらってんのがプロトケラトプスや。梅雨の晴れ間が嬉しくてどれも必死で動いてるやろ。

レイ ハツコちゃん。

ハツコ 何。

レイ こないだ氷河期来たんとちゃうんか？

ハツコ 来たで。

レイ 全部無くなるって言うたやろ。

ハツコ 全部無くなってるやんか。

レイ まあ…、確かに無くなってるけど。

ハツコ 何よ。

レイ でもまだおるやんか、あそこに。

ハツコ ああ。

ハツコ、笑みを浮かべ、

ハツコ 前におった恐竜とは種類がちやうねん。それが証拠に前のティラノサウルスやトリケラトプスはおらんやろ。

レイ 分らん、そんな細かいこと。

ハツコ 恐竜はな、人間より遙かに長い時間を生きてたわけよ。なんせ2億3千万年前に現れて、6500万年前に滅びたって言われてるんやから。それを引き算すると、はい、なんぼ？

レイ なんや、いきなり。

ハツコ 算数や。

レイ 出来るわけないやろ。何千万とか何億なんて数字見たことも触ったこともないねんから。

ハツコ そこで開き直るか、子供。2億3千万引くところの6500万は1億6500万や。1億6500万年という長あーい時間のうちに周りの環境も当然変わるわな。すると恐竜自体も環境に合わせて変わって行かざるを得なくなる。

レイ それは分かったけど、恐竜は氷河期が来て絶滅するんやんな。

ハツコ そうや。

レイ 絶滅してぜんぶいなくなるんやんな。

ハツコ そうや。

レイ ほな、なんであそこにおるん。

ハツコ そりや今おるやつが、こないだのやつよりも前の時代に生きてたからに決まってるやん。

レイ はあ？ 訳分からんわ。

ハツコ なんで。

レイ だって順番が逆やんか。

ハツコ 順番？

レイ そうや。こないだのやつが先におって、今おるやつが後に出て来るのが筋道ってもんや。ハツコ 筋道って、子供のくせに頭固いこと言うてたらアカンで。人間かて60歳で還暦を迎えるやろ？

レイ 還暦？

ハツコ そう。60になったら人間は赤ん坊に戻って行くねん。

レイ 赤ん坊に戻る？

ハツコ そうや。年いったら人間はみんな赤ん坊に戻って、お母さんのお腹の中へと帰って行くねん。

レイ …お母さんのお腹の中…。

ハツコ つまり氷河期が恐竜の還暦やな。氷河期を境に恐竜は始まりに戻って行くねん。で、どんどんどんどん戻って行って、地球ができた頃に一面覆ってた水の中へと帰って行くんよ。

レイ 水の中？

ハツコ そ。命はみんな水の中から始まる。

レイ へえ…。

ハツコ なんでも順番通りに行くと思たらアカンで。

レイ うん。

ハツコ だいたい順番なんてこと言うてたらクリコの周りの人間、誰も結婚できへんやろ？

と、部屋の隅で書類を見ていたクリコを振り返るハツコ。

クリコ、顔を上げ、

クリコ レイちゃん。

レイ ン。

クリコ いつまでも誇大妄想に付き合ってたらだめよ。未来ある将来がペアになる。

レイ 分かった。

クリコ (ハツコに) ねえ。妄想の“もう”はどんな漢字書くか知ってる？

ハツコ 漢字？ (少し考え) 健忘症かなあ。

クリコ 亡くなる女って書くのよね、確か。

ハツコ 何それ。

クリコ 妄想に走る奴は女を無くしてることよ、きっと。女を捨ててる、と言った方がいいかなあ。

ハツコ アタシはまだ捨ててないで、女。このビルの7階に骨を埋めようと思ってるやつほどにはな。

クリコ 占いの館したいからこの部屋シェアさせて、って泣きついて来た時に覚悟したんじゃないの？ ここに骨を埋めるって。

ハツコ そんな古い物ほじくり返すのは下の工事現場に任せようや。

クリコ …工事現場か。

ハツコ うん。

クリコ ……そうやなあ……。

と、つぶやくクリコ。

ハツコは、慌てて、

ハツコ ちよっとそんなマジに取らんとってや。

クリコ でも、なんか見えるみたいでねえ。この先のこのビルが。

ハツコ え。

クリコ ここが更地になって、真新しいおっきなビルが建って、その中のちっさなスペースに高い家賃払って借りることになるのかなあって。

ハツコ ……そんなこと考えてるん？

クリコ そんなこと？

ハツコ クリコも立ち退き考えてんの？

クリコ ハツコでしょ。「今が潮時や」っていつも言ってるの。

ハツコ だって「一人でも頑張る」がクリコの口癖やから……。

クリコ、窓の外を見つめ、

クリコ 潮時ってあるのかもね。孤立無援じゃ先が見える。

ハツコ 孤立無援って……。

クリコ だってそうでしょ。周りみーんな立ち退いてさあ。

ハツコ あいつか。

クリコ え。

ハツコ 隣りのオヤジが諸悪の根源か。頑張るとか言いながらサツサと裏切りおって。

クリコ あの人もここまでが精一杯でしょ。家族もいろいろ言ってたみたいやし。私は家族いな
いしね。

ハツコ おるやんか、弟が。

クリコ いないのと同じよ。あの子はアメリカで自分の生活があるし。

ハツコ 帰って来いって言えばエエやん。

クリコ 言えないよ。親が死んだからこのビル、管理しろなんて。

ハツコ そやけど姉弟きょうだいやろ？

クリコ 姉弟ほど当てにならないものはないって。他人の始まり。

ハツコ 夫婦はもつと他人やで。

クリコ 他人でも毎月お金をくれる。

ハツコ あれは慰謝料。

クリコ それでも入ればありがたい。

ハツコ 子供に金かかるからな、ウチは。当然のことや。

レイ、ハツコの言葉に、

レイ ハツコちゃん、子供おるんか？

ハツコ おるで、4歳の子が。

レイ ハツコちゃん、結婚してるんか？

ハツコ 前はな。

レイ 前？

ハツコ そ。今は子持ちの独身。

クリコ、ハツコを見て、

クリコ エリカちゃん、どう？

ハツコ どうって？

クリコ 具合の方。

ハツコ なあんも変わらず。毎日シューッポン、シューッポンって呼吸してるわ。

レイ 汽車みたい。シューッポ、シューッポって。

ハツコ 汽車と一緒にやな。機械が動くたびにシューッポン、シューッポンやから。

レイ 機械？

ハツコ うん。生まれてずっと機械と一緒に呼吸してるわ。

レイ ……そうなん？

ハツコ ベッドの横に座るとな、シューッポン、シューッポンって音で今日は機嫌いいとか悪いとか分かるねん。シューッポン、シューッポンって音で会話するねん。そのうちエリカが生きてるんか、機械が生きてるんか分からなくなってる。もしかしたら動かないエリカが機械で、動いてる機械がアタシの子供なんかなあ、って思えて来る。外歩いててもあちこちの機械がみんな生きてて、人間が作り物に思えて来るねん。

クリコ、ハツコとして、

クリコ だから外見て…。

ハツコ 機械のおかげや。昔やったらエリカみたいな子はとくに死んでるわ。でも今は弱い子も生きてられる。機械が自然淘汰に歯止めをかけてくれるからな。

レイ でもその子、動けへんねやろ？ しゃべれへんねやろ？

ハツコ そうや。

レイ ……ほんまに子供おって良かったか？

ハツコ おる方がエエに決まってるやん。

レイ そうなん？

ハツコ うん。少なくとも毎日昼までは行く所がある。

レイ ……それだけ？

ハツコ それで十分やないの。他に行ってくれる人、おらんねんから。

レイ 行くだけ？

ハツコ そ。守るのは病院の人ら。

レイ ……そうか。

ハツコ あ、クリコにとってはこのビルが子供やな。

クリコ その子供が今、生命の危機にさらされてる。私は子供を守りたいなあ。

ハツコ クリコはちゃんと守るんや…。

クリコ まあね。それなのにどうしてみんなこうあっさりと手放せるのかなあ。

レイ (クリコに) あっさりと手放せないものなん？ 自分のビルって。

クリコ そりやそうよ。

レイ ほな、子供やったら手放せるん？

クリコ え。

レイ 自分の子供やったらあっさりと手放せるんか？

クリコ 私、子供いないけど。

その時、レイ、額を押さえ、

レイ 冷た！

ハツコ 何？

レイ なんか落ちてきた。

と、天井を見上げるレイ。

ハツコも、天井を見上げ、

ハツコ また雨漏りか？ 昨日、よう降ったしなあ。

クリコ 雨漏りなんかしてないよ。

ハツコ 屋上のひび直した方がエエよ。

クリコ 雨漏りなんかしてないって言ってるでしよ。

ハツコ なあ、クリコ。

クリコ 何よ。

ハツコ ……そろそろ来る時間やろ？

クリコ ……。

そっぽを向くクリコ。

レイ (ハツコに) 誰か来るんか？

ハツコ コンサルタント会社の人が来るんやて。

レイ なにサル？

ハツコ サルって。ま、みのお箕面の猿と一緒にやわな。歯あ剥き出して弱そうな人間狙って物巻き上げるんやから。

レイ それって何？

クリコ この辺り全部を新しい街に造り直したいから、このビルをつぶさせてください、ってね。

レイ つぶすんか？　ここ。
クリコ ……。
レイ　なあ、つぶすんか？
クリコ　(苛立たしげに)　いちいち大人の話に口はさまないですよ！
レイ　……うん……。

間。

クリコ　……ごめん。
レイ　ううん。
クリコ　ここが最後やから相手も必死なのよ。何遍会っても埒があかないし今日から担当の人変えるって。
レイ　うん。
クリコ　私だって分かってるよ、潮時くらいは。
ハツコ　……クリコ。
クリコ　ん。
ハツコ　ぼちぼち変えとこか？　ここ、事務所バージョンに。
クリコ　まだいいよ。
ハツコ　いつも嫌うのに。
クリコ　この方が気が紛れるから。
ハツコ　落ち着くやろ、これ。

と、赤い室内を見渡すハツコ。

ハツコ　赤はお母さんのお腹の中やから。
クリコ　……お腹の中……。
ハツコ　そう。赤はこれから先の世界を暗示する胸騒ぎと安らぎの夢の色や。人間はみんなお母さんのお腹の中でいろんな夢を見るからな。……卵の夢。魚の夢。両生類の夢。爬虫類の夢。哺乳類の夢……。生命が35億年かけて進化して来た全ての時代の夢を見るのが、お母さんのお腹の中やねん。だから落ち着くんよ。
クリコ　……そう。
レイ　……お母さんのお腹の中……。

と、クリコを見るレイ。
クリコ、その視線に気付き、

クリコ　何？
レイ　……なんでもない。

その時、ドア・チャイムの音。

クリコの顔色が、変わり、

クリコ え、もうそんな時間？

すると、ドアが開いて、ナナが顔を出した。その身なりは一見派手だが、安っぽさが滲み出ている。

ナナ おはようございます。

クリコ なんだ……。こんにちは。

ナナ 何？ なんだ、って。

クリコ 別に。

ハツコ おはようってもう昼過ぎてんで。

ナナ エエのエエの。ウチら夜でも“おはようございます”やから。

と、入って来るナナ。

ナナ (レイを見て) お、また来てるな。階段一段飛ばしのチビッコ。

レイ チビッコちゃうわ。レイや。

ナナ ごめんな、すぐ忘れるねん。でっかい名札付けといて。

レイ くさっ。

ナナ え、なんか臭い？

レイ 臭いわ。変な匂い。

ナナ (自分を嗅ぎながら) え、なんやろ。

ハツコ (ナナに) ちょっときついで、香水。

ナナ なぁんや。これは大人の女の香りやで。ほら。

と、レイの鼻に手首をこすりつけるナナ。

レイ (それを払いながら) 臭い。寄るな。

ナナ 大人になったら男はみんなこの匂いにへろへろになるんやで。今から慣れとき。

レイ アホか。

ナナ え。まさかへろへろにさせる方か？ チビッコ。

レイ どアホ。

ナナ ま、男でも女でもエエわ。威勢のエエところは買ったろ。

クリコ 今日も暇つぶし？

ナナ ちゃうちゃう。今日はちゃんとしたお遣いや。ママからの預かり物。はい、来月の分。

と、封筒を差し出すナナ。

クリコ、それを受け取り、

クリコ ありがと。お宅はいつつもきっちりしてるから助かるわ。

ナナ え、金払い悪いところあんの？

クリコ まあ、11軒あるとね、それなりに。

ナナ へえー、当てたるか。えーっと、5階の怪しい事務所やる。

クリコ さあ。

ナナ あそこ、ウチがいつ行っても門前払いやで。絶対、中には入れてくれへんねん。それか2階の小料理屋か？

クリコ (領収書を書きながら) 口が裂けても言わないよ。特にナナちゃんの前ではね。

ナナ わ、そんなん言う？ でもな、みんな心配してんで。ここもそろそろ立ち退きやって。

ハツコ ナナちゃん。

ナナ だって隣りのビルもとうとう立ち退くらしいやん。ここが最後やろ？ 下のパーマ屋なんか、もう新しい場所探してる言うてたで。

クリコ そうなん？

ナナ うん。もう時間の問題やってみんな噂してるわ。

クリコ ……そんな。

ハツコ (ナナに) みんなって誰よ。

ナナ みんなはみんなや。ここ借りてるみんな。

ハツコ そうやってあちこちで油売ってるんや。

ナナ 油って営業や、営業。ウチら客商売やし、ご近所さんと仲良くしとかな売り上げに関わるからな。それでなくても周り工事だらけで人少ないのに。

ハツコ 工事現場の人ら口説いてみたら？

ナナ そんなん、とつくにしてるって。

その時、再びドア・チャイムの音。

クリコの顔色が、変わる。

すると、ミナミが入って来た。ミナミ、息をゼイゼイ切らしながら、

ミナミ こん、にちは…。

ハツコ・レイ こんにちは。

ナナ おはようございまーす。

クリコ ……なんだ。

ミナミ え、なんだ、って？

クリコ 別に。

ハツコ また階段で来たんかいな。

ミナミ はい。だって、先生、階段、使って、だから。

ハツコ (レイに) アンタが言うたこと、ちゃんと守ってるんやで。この人。

レイ 何が。

ハツコ 体のためにはエレベーターより階段の方がエエって。

レイ ああ…。ハツコちゃんも階段使てるんか？

ハツコ 使てるよ、ちゃんと。

ナナ (疑いの目で) へえー。見たことないけどなあ、階段使てること。ウチの店から階段はよお見えるでえ。

ハツコ ちゃんと使てるよ。ちゃんとたまに。

レイ たまに、か。

ミナミ すいません。お手洗い、借りて、いいですか。

ハツコ なんや、来て早々。

ミナミ 我慢、して、たんで。駅から。

レイ 急いでる時は使てエエで。エレベーター。

ミナミ いえ。直感は、大切、なんで。

レイ は？

ミナミ だからね、

ハツコ (遮って) エエから早よ行つて来いな。

ミナミ はい、すいません。

と、洗面所の方へ去るミナミ。

ハツコ あの子、毎日階段で来るねん。

クリコ 真面目よねえ。ハツコが階段使つたのつて、あの一回きりなのに。

レイ なんや、一回きりか。

ハツコ 既に固定客も掴んでるしな。

ナナ え！ ここそんな商売もやってんの？

クリコ 何？ そんな、つて。

ナナ やるなあ。税理士事務所の裏の顔は、占いと売春かあ。

ハツコ 失礼やな。占いの館はれつきとした表の顔や。

ナナ そう。

ハツコ おまけにどつから売春なんて発想が湧いてくるねん。

ナナ え、ちゃうの？

ハツコ ちゃうわ。

ナナ ほな何やつてるん？ あの子。

レイ あの子ちゃう。ミナミちゃんはハツコちゃんの弟子やんか。(ハツコに)なあ。

ハツコ そういうこと。

ナナ なあんや。あの子も占いオタクか。

レイ あの子ちゃう。ミナミちゃん。

ナナ はいはい。

ハツコ ナナちゃん、占つたらるか？

ナナ いらんいらん。占いなんで辛しん気きくさいもん。

ハツコ あ、そう。

その時、電話が鳴る。

電話の一番近くに居たナナは、受話器を取り、

ナナ 五ツ木税理士事務所です。…新聞なんか要りませんよ。……は？ ちゃうの？ ……何それ。ここ美容院とちゃうで。……だから、スパイラルなんとかとちゃうつて。……おたく、しつこいなあ。何遍言うたら分かるんよ。

と、電話で言い合っているナナ。

ハツコ え！ ちよつと待ってよ。

と、ハツコは、慌ててナナの手から受話器を奪い、

ハツコ もしもし、もしもし。スパイラルムーン・エリカ占いの館です。……はい、そうです。いつもお世話になってます。申し訳ありません。よその者が取りましたもんで。……すいません。

ナナ ……え。

クリコ (ナナに) ハツコの名前。スパイラルムーン・エリカ。

ナナ ……そうなん？

クリコ そう。

ナナ あちや……。

レイ ドアホ。

ハツコ (電話で) ……と申しますと？ ……はい。……え！ なんですか。……そんなこと急に言われても。……それ、おかしいじゃないですか。……そんなん納得いきませんよ。ちゃんと話しましょうよ。とにかく行きますから。……はい。

と、受話器を置くハツコ。厳しい表情で、出かける支度を始める。

ハツコ (独り言で) そんなアホなことあってたまるかいな。

クリコ どうしたの？

ハツコ どうもこうもないよ。新聞社がな、占いのコーナーからアタシを降ろすつて言うねん。経費削減の時代にわざわざ占い師に金払う必要ないつて上から言われたつて。

クリコ 占いのコーナーを無くすの？

ハツコ それがちやうねん。コンピューター管理やて。占いなんか適当に信憑性のありそうな言葉並べといたら読者は納得するつて。

レイ それ詐欺やんか。

ナナ ……それつてウチがあんなん言うたせい？

ハツコ ちやうちやう。

ナナ はあ、良かった。

ハツコ (ナナに詰め寄り) でもな、あれはないんちやうの？ 印象悪いしダメージ100や。

(舌打ちして、思い直し) って言うてもしやーないか…。とにかく行ってくるわ。

と、出て行くハツコ。

クリコ・レイ 行ってらっしゃい。

ナナ 頑張ってなあー。

間。

やがて、トイレの水を流す音が聞こえる。

ナナ って言うて頑張れるもんちゃうか。

クリコ 頑張れ、頑張れ、か…。

ナナ ま、相手が言うこともその通りやしな。

クリコ え。

ナナ 占いに金払うなんてアホらしいって。

レイ そんなこと言うか。

ナナ だって占いなんて適当なもんやろ？ そんなんに頼る方がおかしいわ。

クリコ でも何かに頼りたい時もあるじゃない。

ナナ ってクリコさんも当てるの？ 占い。

クリコ 私は違うけど、でもそういう人の気持ちも分かるよ。

ナナ ウチゼーんぜん分からんわ。

クリコ そう。

ナナ ウチの店の男の子でも占いに凝ってる変なヤツおるけどな。ウチの誕生日に占い師に言われたからってプレゼント何くれたと思う？

クリコ さあ。

ナナ 開けてビックリ、猫バスやで。トトロの猫バス。今の時代、ガキでもそんなん喜ばへんわ。

(レイに) なあ、チビッコ。

レイ 貰^{もら}たらなんでも嬉しいわ。

ナナ (無視して) おまけに一緒に付いてたカードがイケてないねん。「いつかこのバスに乗って二人で夢の世界へ行こう。なんちやって」なんちやってやで、ホンマに。一人で妖怪と遊んでろ、つちゆうねん。

戻って来たミナミは、その話を聞いて立ち尽くしていた。

それに気付いたレイは、

レイ ミナミちゃん、こっちおいでや。

ミナミ ……いいの、ここぞ。

レイ (ミナミの手を引き) こっちって。

ミナミ (その手を振り払い) いいってば！

レイ ……。

ナナ (気にせず) 最近はますますエスカレートしててな、占い師に言われたからって「今度の休み暇あ？ ワンワン王国行こか」なんでわざわざ休みの日に臭くて汚いところ行かなアカンねんなあ。ウチは動物嫌いや、つちゅうねん。

レイ (ナナに) 動物の方がアンタみたいに臭いのお断りや。

ナナ (レイに) これは大人の女の香り。動物やチビッコには分からへんねん。

その時、ドア・チャイムの音。

クリコの顔色が、変わる。

すると、トシキが入って来た。

トシキ こんにちは。

クリコ ……なんだ。

トシキ え、なんだ、つて？ (ナナに気付き) あ…、来てたんだ。

と、戸惑うトシキ。

ナナ 噂の本人登場。

トシキ 噂って？

ナナ エエ噂。(トシキに近寄り) 一緒に仕事するの楽しいで、ト・シ・キ。

トシキ ……え。

ナナ 今度デートしよな、ワンワン王国で。

トシキ ……ここでそんなこと言わなくても…。

それでも、嬉しそうなトシキ。

ナナは、笑い声を上げる。

クリコ (トシキに) 何か？

トシキ あ、ユウカさんおられますか？ さっき階段を上って行くの見たんですけど。

クリコ ユウカさん？

トシキ はい。占ってもらおうと思って。

レイ ミナミちゃんならおるで、そこに。

と、ミナミを指さすレイ。

トシキ、ミナミを見て、

トシキ ああ、そんなところにおったんですか。

ナナ え？ まさか。

トシキ (慌てて) え、違うよ、そんな怪しい関係じゃ。

ナナ まさか固定客ってトシキのこと？

トシキ え。

ナナ (ミナミを指さし) この人なん？ よお言うてる占いの先生って。

トシキ そうですけど。

ナナ なあんや！

と、クスクス笑うナナ。

ミナミ、居たたまれなくなつて、トシキの腕を引っ張る。

トシキ え、どうしたんですか。

ミナミ いいから。

トシキ そんなこと言われても…。

ミナミ いいから。

トシキ 痛いですよ。

ミナミ いいから。

と、ミナミは、強引にトシキを引っ張つて出て行つた。

ナナ なあんや、そういうことか。(レイに) な、占いなんてエエ加減なもんやろ？

レイ イイーだ。

ナナ 当たらぬも八卦、当たらぬも八卦や。

レイ いつまでも油売つてたらアカンのちゃうか。

ナナ そやな、そろそろウチも行こか。二人がもめてるとこ見れるかも知れんしな。(クリコに) ほな、おじゃましました。

クリコ いいえ。

レイ、思い切り悪態をついて、

レイ イイーだ。

ナナ (レイに) 可愛いお顔が台無しやで。

と、レイの頭をクシヤクシヤと撫でて、ナナは出て行つた。

レイ どアホー！

クリコ ダメよ。あんまりそんなことしたら。

レイ だってイヤらしいやん、アイツ。

クリコ あれでもお客さんなんやから。

レイ お客さん？

クリコ (赤いテーブル・クロスを外しながら) そう。今となつてはこのビルを借りてくれてる大切なお客さん。だからダメよ、そんな態度。

レイ だってムカつくもん。

クリコ ダメなものはダメ。

レイは、クリコを見つめ、

レイ ……お母さん……。

クリコ え。

レイ あ、なんかお母さんみたいやな、と思て。そんなふうに言われたら。

と、レイも、クリコを手伝って赤いテーブル・クロスを一緒にたたむ。

クリコ お母さんか……。

レイ うん。

クリコ 私に子供がいたらどんな子かなあ……。

レイ (真顔で) どんな子やと思う？

クリコ 素直な可愛い子。

レイ 素直な可愛い子？

クリコ そう。

レイ (ふくれて) 世の中そんな上手く行けへんで。

クリコ (少し笑い) そうよね。手に負えないやんちゃな子かもね。

レイ そんなもんや。

クリコ レイちゃんみたいに。

レイ ……イヤか？ やんちゃな子は。

クリコ うーん……。

レイ イヤか？

クリコ それもいいかも。手はかかるけど。

レイ ……。

クリコを見つめているレイ。

クリコ 何？

レイ あ、そうや。

と、ポシエットの中を必死で探るレイ。中から小さなお菓子の箱を取り出す。それをク

リコに差し出し、

レイ はい。

クリコ え。

レイ これ。

クリコ いいよ、そんなん。

レイ あげる。

クリコ いいって。

レイ あげるって。

クリコ 貰っても私こういうの食べないよ。

レイ いいねん。

クリコ 大事なんじゃないの？

レイ 大事やから…、大事やから貰ってほしいねん。

クリコ ……そうなの？

レイ うん。

クリコ (受け取りながら) じゃあ貰うわ。ありがと。私もいつか大事な物あげなきゃね、レイちゃんに。

レイ エエで、そんなん気にせんでも。

クリコ うん。

レイ ほな行くわ。

クリコ またね。

レイ ……え。

クリコ またおいで。

レイ うん！ ありがと。

と、レイは、嬉しそうに走って出て行った。

クリコは、腕時計を見る。そして、お菓子の箱をサイド・テーブルのジュースの横に置くくと、赤い灯りを蛍光灯に変えた。

ジャージャーと水の流れる音が聞こえている。

クリコ またあ。レバー下げろってちゃんと書いたのに。

と、クリコは、洗面所の方へ行く。

ドア・チャイムの音。

結城が、入って来る。

結城 ごめんください。

クリコ (洗面所の方から) はい。

結城 昨日、お電話しましたサンコウの結城です。今日から新しく担当させていただきます。
クリコ お世話様です。

と、戻って来るクリコ。

結城 ……こんにちは。

クリコ ……え。

クリコは、結城を見て言葉を飲んだ。

やや間。

クリコ　なんで。

結城　久しぶり。元気やった？

クリコ　結城って…。

結城　うん、僕。

クリコ　でも…。

結城　婿養子に行ったから。

クリコ　…そうなんだ。

結城　子供も2人おる。

クリコ　そっか。幸せなんやね。良かった。

と、努めて微笑むクリコ。

結城　クリちゃんは？

クリコ　え。

結城　結婚。

クリコ　してないよ。いろいろ忙しくってね。

結城　そっか。

クリコ　すごい偶然よね、ビックリした。

結城　うん、僕も。

クリコ　元気そうで良かった。

結城　クリちゃんも元気そうで良かったわ。

クリコ　忘れるもんよね。

結城　何を？

クリコ　電話の声。昨日話してもちっとも分からなかったわ。

結城　僕もおんなじや。まさかクリちゃんとはなあ。

クリコ　ほんとほんと。あ、入ってよ。

と、結城を中に導くクリコ。

結城　おじゃまします。

クリコ　どうぞどうぞ。

結城　(室内を見回し)　へえー。

クリコ　(椅子を勧めて)　どうぞ。

結城　あ、ありがとう。

クリコ　なんのお構いもできませんが。

結城　氣い遣わんでエエで。僕、仕事やし。

クリコ　あ…、そうよねえ。

結城　そうそう。

と、なおも室内を見回す結城。

クリコ 何？

結城 今はここ手伝ってるんや。

クリコ 手伝いじゃないよ。私が管理してるの。

結城 え、お父さんは？

クリコ 父は4年前に亡くなったから。

結城 そうか。

クリコ まいるよねえ、こんな置き土産残して。おかげで今、大変よ。

結城 (室内を見回し) 変わらへんなあ。

クリコ 何が。

結城 あ、クリちゃんも変わらへんけど、ここな、あの頃のまんまや。

クリコ あの頃？

結城 僕、一緒に来たやろ、ここに。

クリコ ……そうやつけ。

結城 うん。クリちゃんがお父さんに頼まれて何か届けに行く時、僕もついて来て、お父さんと

三人で、

クリコ (遮って) 覚えてないわ、そんなの。

結城 ……覚えてないか。

クリコ 昔の話やし。

結城 そやな…。まあ、今日はお父さんと話すことになると思ってたんやけど。

クリコ ……え。

結城 まさか本人とはなあ。

クリコ どうゆうこと？

結城 え。

クリコ 知ってて来たの？ ここがうちのビルやって。

と、結城を見つめるクリコ。

結城 ……。

クリコ ねえ。

結城 ……ホンマは覚悟してた。

クリコ 覚悟？

結城 うん。次の担当、この辺りで五ツ木さんって聞いた時から。

クリコ ……そっか。

結城 電話でしゃべった時からそんな気もしてたし。クリちゃんやなあって。

クリコ でもさつき電話の声、分からなかったって。

結城 あれ、嘘や。

クリコ 初めっから私に会うの分かったの？

結城 それもあるとは思ってた。

クリコ そうなの？

結城 うん。

その言葉に、クリコは結城をじつと見つめ、

クリコ 私、このビルは手放さない。

結城 僕が…、僕が頼んでもアカンか？

クリコ だから余計に手放せない。

結城 でも周り見てみい。クリちゃんとかだけやで、残ってるの。頑張るにも限度が、

クリコ (遮って) 分かってるよ、それくらい。あなたにだけは明け渡したくないってそれだけ

よ！

結城 ……。

互いに厳しい眼差しで見つめ合う二人…。

やがて、結城は目を逸らし、

結城 そっか。ほな、担当変わらなアカンな。

クリコ そうして。

結城 分かった。帰るわ。

と、結城は、ドアの方へ向かう。その時、振り返り、

結城 なあ、クリちゃん。

クリコ 何？ 結城さん。

結城 結城さん、か…。

クリコ だってそうでしょ。

結城 ま、エエけど。…あのなあ。

クリコ 何。

結城 今日の夜、一緒にご飯食べへんか？

クリコ え。

結城 仕事の話は一切抜きにして。

クリコ 結構です。

結城 ゆっくり話もしたいし。

クリコ 私は話なんてありません。

結城 美味しい店知ってんねん。

クリコ 美味しい物は結城さんと一緒に食べたくありません。

結城 そっか…。残念やな。

と、名刺を取り出し、その裏に何か書き込む結城。

結城 帰るわ。

クリコ さようなら。

結城 (名刺を差し出し) 裏に携帯の番号書いたから。

クリコ は？

結城 仕事終わったら電話してな。

クリコ なんでよ。

結城 御馳走するわ。

クリコ 行かないって言ってるでしょ。

結城は、クリコに名刺を持たせ、

結城 そこ、酒も美味しいの置いてるし。電話待ってるぞ。

と、出て行った。

クリコ ちょっと…。

残ったクリコは、名刺を見つめていた。
暗転。

7月

蛍光灯の部屋。

レイとミナミが、窓から下の方を眺めている。

レイ あれな、ほら、ゆる〜くり首動かしてるのがフロントサウルス。そんで、あっちのごつついやつがブラキオサウルスや。みんな首長くて背えは高いけどな、草食性やから気は優しいで。ミナミ へえ。気は優しくて力持ちか。

レイ 今、恐竜はな、始まりにどんどん戻って行ってるねん。どんどんどんどん戻って水の中へ帰って行くねん。そやからそのうちみんなおらんようになるぞ。

離れて座っていたハツコが、

ハツコ そりゃ工事が終わればいなくなるよ、どれも。

レイ 工事って…。恐竜はハツコちゃんが言うてたことやろ。

ハツコ、窓に近寄り、

ハツコ レイちゃん。

レイ ん。

ハツコ あれは恐竜ちゃうで。ただの機械や。人間が造り上げた物全部壊して、また別の物を造るだけの機械。そんな物に感情移入したらアカンで。

レイ してたのハツコちゃんやんか。

ハツコ レイちゃん。

レイ 何。

ハツコ 人間が機械を作ってん。人間が使うから機械は動くねん。人間が機械に使われたらおしまいや。

レイ ……え。

ミナミ (レイに小声で) ほら、新聞の占いのコーナー、コンピューターになったから。

レイ ああ…。

ハツコ このままやったら人間が機械に淘汰されてまう。今も流れてる進化の途中で人間が機械に滅ぼされるなんて御免や。命のない機械なんかに人間の居場所取られて黙って引き下がるかいな。アタシは負けへんで。

レイは、大きく微笑み、

レイ うん。その意気や。

ハツコ なあ、氷河期が恐竜の還暦やって話、覚えてる？

レイ うん、覚えてるで。

ハツコ 今、人間自体も還暦やねん。

レイ 人間も？

ハツコ そう。西暦2000年が人間の還暦やったんよ。だってあんなこと起こって、こんだだけ機械がはびこったら、もう人間は戻って行くしかないやろ、始まりに。そやから人間の還暦や。

レイ (ハツコを見て) 人間はどこへ戻って行くんや？

ハツコ さあ。

レイ 水の中か？

ハツコ なんで。

レイ 命はみんな水の中から始まる。

ハツコ (小さく笑い) そうかも知れんな。終わりの始まりや。

と、レイの頭を撫でるハツコ。

レイ なあ。

ハツコ ん。

レイ ハツコちゃんもか？

ハツコ 何が。

レイ 終わりの始まり。

ハツコ そやなあ…。

と、ハツコは、少し考えて、

ハツコ うん、アタシも終わりの始まりや。(ミナミを見て) な。
ミナミ はい。

レイ ミナミちゃんも一緒に行くんや。

ミナミ うん。先生と一緒に始めるわ、新しい占いの館。

レイ そっか。

ミナミ うん。

ハツコ (ミナミに) 他に助っ人もおるしな。

ミナミ はい。

レイ 誰？

ミナミ もう来る頃だけど。

レイ へえ、楽しみやな。

ハツコ レイちゃん。

レイ ん。

ハツコは、レイを見つめて、

ハツコ アタシは人の血の通った占いをこれからもする。

レイ 血？

ハツコ そう、赤い血、生きた血、人間の血や。機械に血は無いからな。そんで、もがくだけでもがいて自然淘汰されたらそれはしやあない。その時は潔く淘汰されてやろうやないの。それも生物進化の歴史のうちや。(ミナミに) なあ。

ミナミ はい。レイちゃんも遊びに来てね。

レイ え。

ミナミ 新しいとこに遊びに来て。

レイ ……行かれへん。

ミナミ お母さんと一緒に電車で来たら？

レイ ……行かれへんもんは行かれへんねん…。

そこへ、クリコと結城が、やって来た。

結城 こんにちは。

ミナミ 良かった。間に合って。

クリコは、ハツコを見ると、目を逸らして、事務机に向かった。

ハツコ なんや、一緒やったんや。

結城 お昼を一緒に食べてたんですよ。今後の手続きのこととか話しながらね。
ハツコ へえ……。

ハツコ、クリコに近寄り、

ハツコ クリコ。

クリコ 何。

ハツコ 今までありがとうな。

クリコ 私、忙しいから見送らないよ。

ハツコ アタシ、ホンマに感謝してるで。離婚したてでエリカ抱えて路頭に迷った時、ここ貸

してくれたのクリコやし。前の職場でほんの少しの間、一緒に働いただけのアタシにな。見様見真似で占い師を始められたのもクリコのおかげや。

クリコ ちゃんと家賃払ってくれてたから。

ハツコ そやな。

クリコ そう。

ハツコ あんな……、アタシ、エリカを引き取ることにしてん。

クリコ、ハツコを見て、

クリコ え。

ハツコ エリカを家に引き取る。在宅看護や。

クリコ 大丈夫なの？

ハツコ 大丈夫。

クリコ ほんとに？

ハツコ そりゃ……、不安は少し、いや、大分あるけどな。アタシがおらん時はヘルパーさんに来てもらって、アタシがおる時はアタシができる限りのことをする。エリカはアタシの子供やから。

クリコ お金の方は？

ハツコ お金？

クリコ うん。先立つ物が要るでしょ。

ハツコ それは大丈夫や。別れた相手が大したタマヤからな。伊達に離婚はしてないで。

クリコ そっか。

ハツコ そうそう。メンバーもバッチリやし、場所もエエ所見つけたし。(鉢を持ち) ちゃーんとこのお鉢でな。あ、これによると今日が旅立ちには最適の日やねん。

クリコ やっぱり最後も占いか。

ハツコ そ。占い師はなんでも占って決める。

クリコ エリカちゃんのことも？

ハツコ あったりまえやんか。

と、鉢を掲げるハツコ。

その時、ドア・チャイムの音。
そして、トシキとナナが、現れた。

ナナ おはようございます。
ハツコ おはようつもりもう昼過ぎてんで。
ナナ エエのエエの。ウチら夜でも「おはようございます」やから。
トシキ ハツコさん、車回しておきましたよ。
ハツコ お疲れ様。
トシキ 下の小料理屋の引越しと、かち合って車置くのに手間取りましたよ。
ナナ (トシキに) 明日は上手くやってや。下でポーツと待つのイヤやで。
ミナミ 明日、何かあるんですか？
ナナ ウチらの店の引越しや。一応トシキはまだウチの店の人間やし。

ミナミ、挑むように、

ミナミ でもその後は私達の同僚ですから。
レイ 同僚って？

トシキ 僕もハツコさんと一緒に仕事するんです。

レイ なんや、アンタが助っ人か。

トシキ そうです。

レイ 頼りない助っ人やな。

トシキ ほっといてください。

ナナ (トシキに) 今まで通り一緒にウチらとやればエエのに。辛気くさいわ、占いの館なんか。
トシキ 僕はそのちの方がいいんで。

ミナミ そうですよ。本人が決めたんだからいいじゃないですか。

ナナ そんなマジになりなや。だから辛気くさいねん。

ミナミ ほっといてください。

ナナ 受け流しいな、サラッとサラッと。

ミナミ ほっといてください。

クリコ トシキくんも占いの？

トシキ 違いますよ。僕はスナック担当です。

クリコ スナック担当？

ハツコ 占いの館とスナックの合体や。その方がお客さんもゆっくりできるやろ。

クリコ へえ。

結城 僕も寄せてもらおかな。

トシキ ぜひ来ててくださいよ。

結城 どうですか？

トシキ (ポケットから名刺を取り出し) 名刺も作ったんで。場所ここに書いてます。

結城 (名刺を受け取り) ありがとう。

トシキ クリコさんと一緒にどうぞ。

結城 (クリコを見て) やって。
クリコ ……。

気まずい間。

ナナ、それを払うように、

ナナ (トシキの肩に手をかけ) 結局一回もデートせずやったな、トシキ。
トシキ そうですね。

ナナ (手を出し) ウチにも名刺ちょうだい。

トシキ え。

ナナ 遊びに行くし。

トシキ ……。

チラッと、ミナミを見るトシキ。

ミナミは、不機嫌そうな顔。

ナナ (手を出し) ほら。

トシキ ……無いです。

ナナ なんてえ。さっき一杯持ってたやんか。

トシキ ナナさんにはちよっと…。

ナナ どうゆうこと??

ミナミ そうゆうことです。

ナナ ウチには来るなってことかいな。

ミナミ 辛気くさい所ですから。

ハツコ、その場の雰囲気、

ハツコ ほらほら、ケちなこと言わんとあげようや。いつ誰に手伝ってもらうか分からんのに。

(ミナミに) な。

ミナミ でも…。

ハツコ ほら、トシキくん。

トシキ ……はい。

と、トシキは名刺を取り出し、

トシキ (ナナに) よろしくお願いします。

ナナ どうも。

結城 (名刺を見て) へえ、“月と星の雫”か。

ミナミ 先生と私の名前の合体なんです。

結城 名前？

ミナミ はい。スパイラルムーン・エリカとメルティングスター・ユウカ。月と星です。
結城 なかなかおしやれやな。

ミナミ (嬉しそうに) そうですか？

結城 うん。必ず寄せてもらいます。

ミナミ お待ちしてます。

結城 そんな時はサービスしてな。仕事の仲間一杯連れて行くし。

ミナミ はい。頑張つて占いますから。

結城 あ、行くのはスナックやで。

ミナミ あ…、そうですか。

結城 そこにおるんやろ？ 自分も。

ミナミ はい。

結城 ほなエエがな。

クリコ (ミナミに) 半分に聞いておいた方がいいよ。

ミナミ どうしてですか？

結城 (ミナミに) 妬いてんねん。

クリコ なんて私が妬くのよ。

結城 (ミナミに) な。

トシキ ハツコさん、そろそろ行きましようよ。遅くなるから。ユウカさんも。

ハツコ そやな。行こか。

ミナミ はい。

ハツコ 忘れ物ないかな。

ミナミ 忘れ物…。(と、見直し) あ、忘れ物。

と、たたんで置いてあつた赤い布を取りに行くミナミ。

ハツコ ああ。

ミナミ (ハツコに手渡し) はい。

手の中の赤い布を見つめているハツコ。

ハツコ なあ、クリコ。

クリコ 何。

ハツコ かけてみてエエかな、最後に。

ミナミ これをですか？

ハツコ うん。

クリコ どうぞ。

ハツコ ありがとう。

と、ハツコとミナミは、事務机と本棚に赤い布をかける。

レイは、それに合わせて、蛍光灯を赤い灯りに変えた。

それぞれがそれぞれの思いで、赤い室内を見渡していた。
やがて、ハツコは、クリコに近寄り、

ハツコ 行くわ。

クリコ うん。

ハツコ 最後まで見送ってよ。

クリコ ごめん。忙しいから。

ハツコ なあ、クリコ。

クリコ 何。

ハツコ 忙しいってどんな漢字書くか知ってる？

クリコ 漢字？ (少し考え) 健忘症かなあ。

ハツコ 心が亡くなるって書くんよな、確か。

クリコ 心が亡くなる？

ハツコ 忙し過ぎたらアカンで、これからも。終わりのない始まり、始まりのない終わりなんて
どこにもないんやから。な。

クリコ ……。

ハツコ (ミナミ、トシキを見て) さ、行こか。

クリコ 行こかって (赤い布を指し) これどうすんのよ。

ハツコ 適当に処分しといて。これはここでの物やから。

クリコ 最後まで手間かけるなあ。

ハツコ 悪い悪い。

レイ レイ、送りに行く。

ナナ ウチも行くか。

ハツコ ありがと。ほなな、クリコ。

ミナミ (クリコに) ありがとございました。

トシキ (クリコに) ありがとございました。

クリコ うん…。

と、クリコと結城を除く皆が、出て行こうとする。

クリコ あ、ちよつと。

ハツコ (振り返り) え。

クリコ あり…、ううん。なんでもない。

ハツコ いいえ！

クリコ ……。

と、皆は、出て行った。

結城 エエんか？

クリコ 何が。

結城 今なら間に合うで。

クリコ いいの。

結城 見送ってやったら？

クリコ いいの。

結城 今まで一緒にやって来たのに。

クリコ (苛立たしげに) 一緒にやって来たって何を？ 何を一緒にやって来たわけ？ ハッコはただここを借りてただけよ。このビルの立ち退きが決まったらさっさと新しい場所見つけて、それでさっさと出て行って。ここの人らもみんなそう。自分達は出て行けるからいいけど私は一人で、一人ですること山ほど抱えてるの。そんなの何が一緒よ。

結城 それが借りてる人間と持つてる人間の違いや。それくらい分かってるやろ？

クリコ 分かってるよ。だから見送れないの！

結城 ……そうか。

クリコ さぞ満足でしょ、このビルの立ち退きが決まって。

結城 そんなこと思っていないで。

クリコ だってこれが結城さんの仕事でしょ。

結城 クリちゃん相手にそんなこと思えるか。

クリコ 調子いいのよ、いつもいつも。自分なら私をなんとかできると思ったんでしょ。だから最後まで担当変わらなかったんでしょ。思い通りじゃない。いい加減、正直に自分の気持ちを話してよ。分からないよ、今も昔もどこに本心があるのか。

結城 ……ごめん。

クリコ もういいよ…。

結城 ごめん。

クリコ ……謝らないでよ。

間。

結城、部屋の中を見回していたが、

結城 ここ、一つだけちやうな。

クリコ 何が。

結城 あの頃はそこに大きなソファがあった。

クリコ ……さあ。

結城 ほら、二人で遊んで終電無くなった時、ここの鍵開けて朝までずっとそのソファの上で、クリコ (遮って) 覚えてないって。

結城 “覚えてない” ばっかしやな。

クリコ 結城さんこそなんで昔のことばっかし言うわけ？

結城 二人でおる時くらい“結城さん”って言うのやめたら？

クリコ だって結城さんやもん。

結城 あの頃はもうちよっと優しくかったで。

クリコ あの頃とは状況が違うでしょ。

結城 状況が違って二人でおる時の気持ちは同じやろ。

クリコ 同じ？

結城 ああ。あの時も今も僕がクリちゃんを大切に思う気持ちは同じや。

と、クリコの肩を抱く結城。

クリコ また口先で。

結城 そない言うけどな、クリちゃんかて懐かしいから一緒におるんやろ？ 僕と。

クリコ え。

結城 あの頃は良かったなあつて。ちやうか？

クリコ、結城の手を離れ、

クリコ 全然違うよ。

結城 ほな、なんでやねん。

クリコ なんで？

結城 ああ。

クリコは、クスツと笑う。

結城 何が可笑しいねん。

クリコ だって可笑しいつて。すごい勘違いやから。

結城 勘違い？

クリコ そう、おっきな勘違い。

結城 どうゆうことや。

クリコ 私が結城さんと一緒におるのはね、今の結城さん確かめたかったから。それだけ。

結城 確かめる？

クリコ うん。この10年ほどの間にどんな男になったか確認してただけのこと。今どんな仕事

してて、どんな生活してて、何に興味があつて、どんな考え方してるか。そりゃ誰だつて知り

たいでしょ、自分が昔付き合ってた男が今どうなってるか。

結城 ……それだけか？

クリコ そう。

クリコ、事務机にかけられた赤い布を取って、たたみながら、

クリコ この布と同じで気が紛れる。ただそれだけ。

結城 それだけで一緒に寝たりできるんか？

クリコ それも確認の一つ。

結城 ……信じられんわ。

クリコ 確かに子供を作らないように努力できるようにはなつてた。

結城 当たり前や。そうせんかったらまた同じこと繰り返すやろ。あれだけは御免や。

クリコ 結城さんの子供さんはいくつ？

結城 年か？

クリコ うん。

結城 4歳と2歳や。

クリコ 私もよく数えるよ。あの時に産んでたら今頃、何歳やなあって。あの時に産んでたらこの先、一人でいる心細さに怯えることもなかったのになあって。

結城 ……そうか。

クリコ 勝手よね。

間。

結城、サイド・テーブルの上に置いてあるジュースやお菓子を手に取り、見つめている。

やがて、

結城 ……僕、営業やる。仕事であちこち行くからあのお寺の前も時々通るねん。そのたんびにあの頃の光景が浮かんで来る。…今もあの小さいお地藏さん達は雨を避けて立ってるんかな

あ。お線香の煙はいつも流れてるんかなあ。あの後、子供が喜びそうなジュースやお菓子や玩具おもちゃ持って、二人でよおこ来たなあ。二人が来なくなつてからはどないしてるんやろ。寂しい思いつてるやろうなあって。…でもやつぱり一人では中へよお入らん。通り過ぎるしかないねん。手を合わせることさえええへんねん。そんで通り過ぎたらちよつとの間で忘れてるねん。あそこを通らん限りは思い出すことさええないねん。

クリコ ……そう。

結城 今これ見て思い出した。

と、暫し、手の中のジュースやお菓子を見つめる結城。

クリコ そんなもんよね。何かあった場所を通つたりしたら鮮明に甦ってくるのに、通り過ぎた途端、忘れてしまう。忘れてることの方がずっと多くなってくる。

結城 まあな。

クリコ 私はね…。

結城 ん。

クリコ あの日、病院に行った時のことを思い出す。

結城 病院？

クリコ うん。あなたは家の用事があるからって、行きも帰りも私は一人で電車に乗った。こんな日に家の用事か、って電車の窓からの景色が動いてた。前の晩、「やつぱり産もう」ってあなたは言ったけど、本気で周りの状況を変ええる気があったのか、一時の感情やったのか、本心は分からない。そんな本心のありかを探すことに、いい加減、嫌気もさしてた。でもね、私はその言葉を聞いただけで満足やった。取り敢えずはあなたなりに心を痛めて考えることに満足やった。私は体を痛めるんやから同じだけ苦しめ、って思ってたから。…あの言葉を聞いた時、私は何もかもを終わりにしようと思った。だからあなたとお腹の子供にさようならを言

った。その後飲んだコップの水が冷たくて美味しかった。すごく美味しくてゴクゴク飲んだ。何杯も飲んだ。たくさんの氷と一緒に水がお腹の中に滲み渡っていった。

結城 そんなこと言うけど僕らが別れたんはそれから一年位経ってからやないか。

クリコ そうやね。

結城 そうや。

クリコ 終わりにするって決めて実行することの方が、そのまま続けることよりも大きな力がい

つたりするからね。…私の中では終わっててもそれを行動に移せないのは今もあの頃と同じかもしれない。

結城 ……そんなこと思ってたんか。

クリコ まあね。

と、お菓子を見ているクリコ。
が、突然、

クリコ えっ…。

結城 何。

クリコ 今、何年？

結城 何年って2002年に決まってるやろ。

クリコ 何、この日付。

結城 日付？

と、そのお菓子を覗き込む結城。

クリコ 90年3月15日製造。

結城 (ジュースを手に取り) これもや。90年5月18日製造。12年前やぞ。

クリコ ……12年前。

結城 なんでこんな古い物、置いてんねん。中身腐ってるぞ、きっと。

クリコ 置いてるんじゃないよ。貰ったの。

結城 誰に。

クリコ 誰にって…。

いつの間にか、レイが二人の傍に立っていた。その顔には満面の笑み。

クリコ ああ、びっくりした。

レイ なんてやねん。

クリコ ハツコ達もう行った？

レイ ハツコって？

クリコ ハツコよ、送りに行ったでしょ。ミナミちゃんとトシキくとナナちゃんも一緒に。

レイ 知らん。レイ、ずっとここにおったし。

結城 おったし、って下に送りに行ったやないか。

結城をじつと見つめるレイ。

結城 ……な、なんやねん。

レイ おっさんか？ 父親は。

結城 おっさんってなあ。

レイ おっさんが父親か？

結城 そりや父親やけど…。

レイ ……ガツカリやなあ。

結城 何がや。

レイ そんな顔に似たないわ。

結城 ほっとけ。うちの子供じゃ。

レイ うちの子供？

結城 そうや。4歳の男と2歳の女。うちの子供や。

レイ おっさん、子供おるんか？

結城 そう。僕によ似た可愛い子やで。

レイ 他には？

結城 他に、ってなあ、人聞きの悪いこと言うなや。僕の子供はこの世に二人しかおらん。

その時、レイ、額を押さえ、

レイ 冷た！

クリコ 何？

レイ なんか落ちてきた。

と、天井を見上げるレイ。

結城も、天井を見上げ、

結城 雨漏りか？

クリコ 失礼ね、雨も降ってないのに。

結城 そやなあ、異常乾燥注意報出てるくらいやしな。

レイ、再び額を押さえ、

レイ 冷た！

結城 またか？

レイ 冷た！ 冷た！ 冷た！ 冷た！

と、頭を抱えるレイ。

クリコ レイちゃん、どうしたの？

レイ 冷たい水がどんどん落ちて来る。なんとかして！

結城 (天井を見上げ) なんも落ちてないで。

レイ 落ちてるやないか。冷たい！

結城 おかしな子やなあ。

レイ、結城を睨み付け、

レイ 早よ帰れ！

結城 え。

レイ 奥さんと子供が心配してんで。

結城 余計なお世話や。

と、洗面所の方へ向かう結城。

レイ おい。出口はこっちや。

結城 分かっとなるわ。トイレ行くだけじゃ、トイレ。

レイ 冷たい！

と、尚も頭を抱えているレイ。

クリコ、レイに近寄り、

クリコ 大丈夫？

レイ 冷たい！ 冷たい！

クリコ レイちゃん。

レイ 水が頭に！ 頭に押し寄せる！

クリコ 何もないよ。

レイ 助けてよ！ 冷たい！ 冷たい！

クリコ どうしたらいいの？

レイ いやあー！

と、大声で叫んで、うづくまるレイ。

洗面所からトイレの水を流す音が聞こえた。それは次第に轟音と化して、レイを巻き込んで行った。

思わず、レイを抱きしめるクリコ……。

やがて大きな水の音は、水道を流す音に変わって行った。

ゆっくりと顔を上げるレイ。

クリコは、レイを抱きしめる手を少し緩め、

クリコ ……大丈夫？

レイ ……うん。

クリコ 良かった…。

レイ うん。

レイは、自分に触れているクリコの手にとっと触れる。

クリコ 何？

レイ ……。

クリコ どうしたの？

水道を流す音は、雨漏りの音に変わっていた。

レイ ……怖かった。

クリコ うん。

やがてレイは、クリコの手から離れ、

レイ もう大丈夫。

クリコ うん。

レイは、立ち上がる。

クリコも、立ち上がる。

レイ あ、そうや。

と、ポシエットの中を必死で探るレイ。中から小さな人形を取り出す。それをクリコに差し出し、

レイ はい。

クリコ え。

レイ これ。

クリコ いいよ、そんなん。

レイ あげる。

クリコ いいって。

レイ 貰ってほしいねん。

クリコ 貰っても私ここの使わないし。

レイ いいねん。

クリコ 貰ってばかりやもん。私なんにもあげてないのに。

レイ これが最後やから。

クリコ え。

レイ、ポシェットをひっくり返し、

レイ ほら、空っぽ。

クリコ それなら尚更、

レイ (遮って) はいって。

クリコ 本当にいいの？

レイ うん。

クリコ (人形を受け取り) ……ありがとう。

レイ いいえ！

と、大きく微笑むレイ。

クリコは、その人形を見ている。
が、ハツとして、

クリコ これって…。

レイ 何？

クリコ どうしてレイちゃんがこれ持つてるの？

レイ どうして？

クリコ だってこれ、ここに刺繍が…、刺繍が入ってる。

レイ 可愛いやろ。

クリコ この服、私が作った…。

レイ それレイのやで。レイが貰^{もら}たやつ。お母さんから。

クリコ お母さん？

レイ うん。…お母さん…。

と、クリコを見つめるレイ。

クリコも、レイをじっと見つめていた。

雨漏りの音は、緩やかに消えて行った。

クリコ レイちゃんって…。

レイ やつと分かったか。

クリコ やつと？

レイ うん。ちよつと寂しかったん、ちよつとだけな。長いこと来てくれへんかったやろ。そやから会いに来てしもた、ここまで。

クリコ ここ？

レイ そう。ここがレイの始まりの場所やから。この場所の、その中で。

と、クリコの腹を指すレイ。

クリコ え…。

レイ 命はみんな水の中から始まるねん。

クリコ 水の中…。

レイ 水って言うてもな、あつたかい水やで。そん中でゆらゆらって夢を見てた。…卵の夢。魚の夢。両生類の夢。爬虫類の夢。哺乳類の夢…。ゆらゆら、ゆらゆら、って。気持ち良かったでえ。

クリコ ……。

レイ だから冷たい水は嫌いやねん。特に頭の上からのジャージャーって水は大嫌いや。

クリコ そう…。

クリコは、レイを見つめ、

クリコ レイちゃん。

レイ ん。

クリコ …私、ずっと後悔してた。どうしてあんなことしたのかって。

レイ うん。

クリコ どうしてもう少し勇気が無かったのかって。産まれなかった子の年を数えながら、目が行くのは同じくらいの子供ばかりやった。

レイ うん。

クリコ 自分が年を重ねるごと、友達の子供が大きくなるごとに一人の自分が余計身に滲みてね。…自分勝手よね。だから子供を持つてるあの人に当たり散らしたりして。

レイ あの人？

クリコ 結城さん。

レイ 結城さんって？

クリコ さつき会ったでしょ。

レイ (顔をしかめ) ああ。

クリコ ああ、って…。いつもお寺にも一緒に行ってたのに。

レイ なんで。

クリコ なんで？

レイ うん、なんでや。

クリコ そりゃ一応、お父さんやから…。

レイは、可笑しそうに笑う。

クリコ 何が可笑しいの。

レイ だって可笑しいやん。お父さんって。

クリコ お父さんでしょ、一応は。

レイ たった種一粒やんか。

クリコ ……え。

レイ 命はお母さんのお腹の中にあるねんで。たった種一粒でお父さん面されたらたまらんわ。
クリコ ……そうなの？

レイ あつたりまえやんか。お父さんなんてあつても無くてもおんなじや。

クリコ あつても無くてもおんなじ？

レイ そうや。

クリコ そうなんだ。

レイ そうそう。

クリコ あつても無くてもおんなじか…。

レイは笑っている。

クリコも、それにつられて笑う。

が、それもやがて消えて行き、

クリコ ねえ。

レイ 何。

クリコ レイちゃんの名前は誰が付けたの？

レイ え…。

クリコ 私が付けたんじゃないし。

レイ そんなん簡単や。

クリコ 簡単？

レイ そ。レイ達はみいーんな同じ名前。みいーんなレイや。

クリコ どういうこと？

レイ だって、なんにも無しのレイやもん。プラスにもマイナスにも成れへん。零のまんまや。

クリコ レイって…、そうゆうこと？

レイ そ、なんにも無しのレイ。

クリコ ……そつか…。

レイ そ。

と、あつけらかんとしているレイ。

レイとは対照的に、クリコは口をつぐんでいる。

その様子に、レイは、

レイ どないしたん？

クリコ ……。

レイ どないかしたんか？

クリコ ……ねえ。

レイ ん。

クリコ 今の私に何かできることは無いかな。

レイ え。

クリコ なんにも無しのままやなくて、何かプラスを作ることはできないかな。
レイ ……ああ。

クリコ、レイを正面から見据えて、

クリコ 私にできることなら言っ。できる限りのことをしたいから。

レイ うーん…。

クリコ ジュースやお菓子買って来ようか？ それとも何か作ってあげようか？

レイ そんな要らん。

クリコ じゃあ、動物園行こうか？ 公園で一緒に遊ぼうか？

レイ そんな要らんって。

クリコ お願い。私にできることをさせて欲しい。

レイは、クリコを見つめ、

レイ ほな…、一つだけエエか？

クリコ 何言ってるの。いいよ。なんでも、幾つでも。

レイ ……。

クリコ 何？ なんでも言っ。私にできることならなんでもするから。

レイ そうなんか？

クリコ うん。

レイ ……。

クリコ ほら、言っ。なんでも。

レイ 分かった。

クリコ 何？

レイ、クリコの正面に行き、

レイ 一回だけ、一回だけでエエねん。

クリコ うん。

レイ ……お母さんって呼んでエエか？

クリコ お母さん？

レイ うん。……呼んでエエか？

クリコ ……。

クリコは、レイから目を逸らす。

レイ ……アカンか？

クリコ ……。

レイ 呼んだらアカンか？

クリコ ……。
レイ ……なあ……。

と、レイの声が、小さくなって行く。
間。

やがて、クリコはレイから少し距離を取り、おもむろに口を開く。

クリコ ……あのね。

レイ うん。

クリコ もし、もしもね、あなたがこの世に生を受けて、今、私の前にいてくれたら私の大きな救いやったかも知れない。いや、きつとそうやったはず。…でも私はあなたを産まない道を選んだ。そしてその後の人生をやって来た。突っ張って、精一杯、突っ張ってやって来た。それなのに今ここで後悔したり、謝ったり、お母さんと呼ばれることを受け入れたら、その瞬間に今まで積み重ねた物が全部、大きな音を立てて崩れ去ってしまう気がする。もうすぐそうなるこのビルみたいに。そして今、崩れたら、もう立ち上がれないかも知れない。今、崩れたら…、もし崩れたら…。だから、だから…、ごめん。

と、うつむくクリコ。

レイは、その様子をじっと見つめていた。
が、

レイ ホンマに頑固やなあ！

クリコ ……え。

レイ たった一つのお願ひもアカンかあ。

クリコ ……ごめん。

レイ やっぱりレイの母親だけあるわ。

クリコ ……母親。

レイは、そつぽを向き、

レイ あーあ。すねたり、怒ったり、引きこもったり、物を壊したり、親を殴ったり、人を殺したり…。そんなことしてたかもな、レイが生まれてたら。

クリコは、思わずレイを抱きしめようと手を伸ばす。

が、レイは、反射的にクリコから離れ、

レイ 触らんとつて。

クリコ え…。

レイ 今も、あの時も、レイのこと切ったやんか。自分とは関係ないって切ったやんか。
クリコ 切るって、そんな…。

レイ 手えなんか伸ばさんといてや。そんな一時の感情に流されたら終わることから逃げてしま
うやろ。始まりをつかまえられへんやろ。どんな感情があつたとしても切つた者と切られた者
との関係はひっくり返らへんねん。

クリコ ……切つた者と切られた者？

レイ そうや。それやつたら最後までそれらしくおろや。おらせてや。…それが切られた者
の精一杯の突つ張りや。

クリコ ……切られた者の突つ張り……。

レイ そうや。……な。

クリコ うん、……そうやね。

と、レイを見つめるクリコ。

レイは、ゆつくりとクリコの正面に行き、

レイ もう行くわ。

クリコ 行くつてどこへ？

レイ 水の中へ。

クリコ 水の中？

レイ うん。終わりを決めたら始まりに戻るしかないからな。

クリコ 始まりに戻る……。

レイ うん。だから……バイバイ。

と、走つて行くレイ。

クリコ あ、ちよつと。

レイ え。

と、振り返るレイ。

クリコは、咄嗟に、

クリコ ありがとう。

と、叫んでいた。

レイ、大きく微笑み、

レイ いいえ！

と、走つて去つて行った。

クリコ ……ありがとう。

と、クリコは、いつまでもレイの去った方を見つめていた。
やがて結城が、ハンカチで手を拭きながら、戻って来る。

結城 何してんねん。

クリコ ……え。

結城 何ボーツとしてんねんて。

クリコ ああ…。

クリコは、遙か遠くを見つめ、

クリコ 夢を見てた。

結城 立ったままか。

クリコ うん、夢を見てた。…卵の夢。魚の夢。両生類の夢。爬虫類の夢。哺乳類の夢。…

そして五ツ木ビルの夢。ハツコの夢。結城さんの夢。あの子の夢。

結城 あの子って？

クリコ うん。あの子の夢。私自身の夢…。ゆらゆら、ゆらゆら、って水の中で、夢を見てた。

クリコの両手には、レイの人形がしっかりと握られている。

結城 おかしな人やな。

クリコ 結城さん。

結城 なんや。

クリコ、結城を見つめ、

クリコ 私始めるわ。だからね…、

輝く水面が、ゆらゆらと反射していた。